

「防災と減災」

宮城県 気仙沼市立松岩中学校 3年 佐藤 優香

橋が落ちている。道路がえぐられている。私と妹はあまりの光景に言葉を失い立ち尽くした…。家族5人でドライブに出掛けた時のことです。父が連れて行ってくれたのが岩手県一関市の山の中でした。川沿いの一本道を進んでいくと、突然それは現れました。自動車を止め、高台に登っていき、そこから見た光景に私は本当に驚きました。橋が途中からポッキリと折れ、無残な姿をさらけ出しているのです。いったい何がおきたんだろう？私は近くにあった案内板の写真と説明文を食い入るように読みました。

2008年6月14日午前8時14分頃に岩手県内陸南部で発生した、マグニチュード7.2の大地震。最大震度は岩手県奥州市と宮城県栗原市で震度6を観測したそうです。私はまだ、小さくその時の記憶がありません。父は屋内にいて、あわてて外にとび出したと話してくれました。この地震で亡くなられた方や行方不明者の方は20人を上回り、数百人も人がけがをされたそうです。突然の地震のために亡くなられた方はどんなに無念だったことでしょうか。残された家族の皆さんはどんなに悔しかったでしょう。その思いは私の想像よりもずっと大きく、今も心の奥底にあることと思います。

この地震は地滑りなどの土砂災害が多かったそうです。父からは山の斜面が崩れ、大量の土砂が川に流れ込み、天然のダムがつけられたこと、その水が決壊すると、下流に住む人たちに大きな被害が出るので、ポンプを使って水を流したことなどを教えてもらいました。

震災後につくられた通路を通り、壊れた橋の近くまで行ってみました。通路沿いにある道路は大きくえぐられ、大地のすさまじいエネルギーがひしひしと伝わってきました。通路の先にはポッキリと折れた橋があります。鳥のさえずりと虫の音しか聞こえない中、全ての時が止まったように感じられ、橋を見ていると、とても恐ろしい気持ちになりました。一緒に見ていた姉も妹も私も言葉が出なくなってしまいました。

私は東日本大震災を経験していますが、正直よく覚えていません。ただ、津波が来ることの恐ろしさと、とにかく高台に逃げることを家族や学校の先生から学んできました。今、この大地の途方もないエネルギーによる土砂災害を前に無力感でいっぱいになりました。地震の時は津波だけではなく、土砂災害にも注意しなければいけないことを実感し、一方で私たち人間の力ではこの自然の脅威の前にはなすすべがないように思われ、無力感を感じてしまいました。

しかし、家に帰って学校の授業で学んだ「減災」について思い出しました。大きな自然の力の前では、私たちにできることは、「微力」ですが、「無力」ではありません。少しでも被害を最小限にするために日頃から準備することが大切だと気付いたのです。準備としてできることの一つ目が「災害への意識を高める」ことです。どんな災害があり、どんな被害がおきやすいのか。災害について関心を持って調べ、知識を得るからこそ万が一の時に備えることができます。私の家族では非常時の持ち出し袋や皆がばらばらになったときの集合場所を確認してあります。また、自宅近くの土砂災害警戒区域等指定箇所を県のホームページで確認し、地震や大雨の時には近づかないように注意しています。

二つ目が土石流や地すべりなどの被害を最小限にするために事前に防ぐための工事を進めることだと思います。工事といってもコンクリートで山を固めるのではなく、木々を植え、手入れをするなど、人が管理する豊かな山をつくっていかれたらと思います。また、社会科の授業で習った砂防ダムをつくっておくことも大事だと思いました。あらかじめ、危険な箇所と起こりそうな災害を予測し、防止のための準備をしておくことが大切だと実感しました。

国土の半分以上が山がちで、環太平洋造山帯に属している日本にとって、自然災害は避けては通れないものだと思います。しかし、「減災」に向けて、「無力」ではなく、「微力」だからこそ、できることを工夫し行うことが大事だと思いました。私も学校で学んだことを家族に伝え、相談し、自然災害への備えをしていきたいと思っています。